

## 共同体の構築における芸術活動の機能：ヘラーの日常生活論を参考に

HUYIHANG

### はじめに

日常生活のリズムは一定のパターンで変化している。桜井徳太郎は、人々の生活リズムの変化を次のように指摘している。

一種の生活のリズムというべきものがあって、それでふだんの生活が続いていくと、ついには、なんとなくマンネリ化し無気力になってしまう。そこで必然的に変化を求める、あるいははじめを求める<sup>1</sup>。

人々の生活のリズムは、日常と非日常の切り替えと強く関連している。さらに、原田保は非日常が個人に与える影響について次のように提唱した。

人はある特定の「場所」に踏み込むと、内なる精神が変化する。この特定の「場所」は、実際の造形物（場所や施設）あるいは、物語のような目に見えないものである。そして、内なる精神の変化は、人々の生活に非日常をもたらし<sup>2</sup>。

非日常は、日常生活においても内なる精神を変わらせるスペースである。農耕時代、人々は農業に依存しているため、生活のリズムは、農業の農繁期と農閑期に沿って調整されていた。季節に関係する年中行事は、日常生活の中に非日常的な活動となる。人々が協力して祝祭に必要なものを用意することもあった。そのため、人々は日常の行動を祝祭の準備に適応させて調整していた。このように、その時の人間の生活リズムは、日々の農作業と非日常的な年中行事を交互に繰り返す、循環的なパターンをとっていた。産業革命が進むにつれて、社会は急速に工業化・都市化した。機械技術の進歩により、農民は農作業農作業の苦役から解放された。人間の生産と生活の質は、自然から解放され、生活リズムは労働時間によって分断され始め、そして生活の価値観は効率と生産性の追求を中心に変化していった。しかしながら、経済の急成長と重度の労働が人々を疲弊させる中、個人と集団の間の緊張感が次第に高まり、個人の疎外が深刻になってきた。

一方で、芸術の形式が進化し多様化する中で、芸術は地域振興の一環として取り入れられ人々の日常のストレスから一時的に逃れる新しい非日常活動の選択肢に加わってきた。1990年代から、地域に根ざしたアートプロジェクトや

国際的な芸術祭が盛んに行われている。国際的な影響力を持つイベントとしては、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」、「瀬戸内国際芸術祭」、「あいちトリエンナーレ」などがある。これらの芸術活動は、芸術作品を地域の日常生活環境に取り入れ、また観光資源として多くの国内外からの参加者を引きつけている。外部からの著名な芸術家の作品を地域に持ち込むことで、室内の美術館での展示とは異なる芸術活動の形が、新鮮さを人々にもたらしている。参加者は芸術作品を鑑賞すると同時に、地域の日常生活の魅力もより深く感じるができる。これは普段とは異なる生活の感覚を体験し、精神的に解放される非日常的な体験与えてくれる。しかしながら、「非日常」に重点を置く芸術体験の傾向は、多くの芸術活動が一時的なユートピアの創造や幻想を作り出すことに偏重することで日常から離れてしまう。このような短期的でイベント的な芸術活動の形態は、芸術の価値を制約する可能性がある。したがって、地域の宣伝手段としてだけでなく、共同体の構築において芸術が果たす役割を再評価する必要がある。

20世紀後半に活躍した新マルクス主義学者アグネス・ヘラー（Agnes Heller）は『日常生活』の中で、日常と非日常の関係を深く探求している。ヘラーの理論が発表されてからすでに相当な年月が経っているものの、日常と非日常の関係についての研究、特に個人の意識が共同体の構築において重要であることを強調する点において、今日の社会の問題を考察するうえでいまなお参照すべきものと思われる。

ヘラーは「日常生活」の中で、日常の中で共同体をどのように構築するかを詳しく調査している。ヘラーの考えによると、未来の共同体は日常生活の基本構造の下で、非日常を通して個人の覚醒を促進し、人々の好奇心や興味を引き出し、探求の欲望を刺激し、価値観を育成することで構築されるものである。このなかで芸術と人々の日常生活の関係性について、ヘラーは次のように述べている。

芸術は人間の自己意識であり、芸術品は常に自為的な本質を持つ存在である…芸術品は常に内面的である。それは世界を人の世界として描写し、人が創造した世界として描写する。その価値基準は人類の価値の進化を反映するものである。芸術の価値基準の最高峰には、本質的な発展過程に最も深くかかわってきた個体（個体的な感情、個体的な態度）を見つけた<sup>3</sup>。

創作過程を通して芸術は、人々の精神を高め

る効果がある。ヘラーは人々の精神の変化については次のように述べている。

芸術品を楽しむと同時に、私たちは自分自身が経験してきたこと、実感してきた日常を思い出している。これらは私たち自身の気持ちと材料である。そしてなによりも重要なのは、私たちが芸術品を楽しむことを通して、社会的な価値判断を学び、社会的な意識や規範で自分を強めることができた<sup>4</sup>。

ところが、地域と結びついた芸術は、人々の日常意識<sup>5</sup>にどのような影響を与え、どのように形成していくのか、そして、これが共同体の形成にどのように寄与していくのかについては、さらなる探求が必要である。芸術に関するヘラーの見解は、芸術が人々の日常生活の精神的側面への影響に集中しており、芸術が具体的にどのように共同体の構築を促進するかについての問題はまだ十分検討されていない。これに対して筆者は、近年の社会と芸術との関係が変化に伴って、芸術がこれまで以上に人々の日常生活の考え方に影響を与え、また共同体の構築を促進する媒体としての役割を果たすであろうと考える。

日本を例に挙げると、20世紀50年代から、芸術は徐々に美術館や博物館から出て、人々の日常生活と関わりを持つようになった。吉澤弥生は当時の日本の状況を次のように語っている。

日本のアートプロジェクトは、美術館に囲い込まれていた芸術を公共の場に解き放つためというよりは、日常生活や社会のなかに「芸術」を見いだしていく実践とみなしたほうがふさわしい<sup>6</sup>。

人々は芸術が自分たちの日常生活とどのように結びついているかに注目し始めた。北澤潤は芸術と人々の日常生活の関係を次のように述べている。

アートプロジェクトのアートは、日々の暮らしの中で非日常の「祭り」を準備する「もうひとつの日常」を生み出す行為なのだ<sup>7</sup>。

地域性のある芸術活動が地元の人々と芸術家の協力により展開されることで、地域住民は自分たちの日常生活に目を向け、それについての反思を始め、日常生活のユニークな価値を認識するようになった。これらの芸術活動は、人々

に自分たちの日常生活を新しい視点から見る機会を提供し、日常と非日常の空間を繋ぐ役割を果たしている。しかし、吉澤らの研究は芸術と日常生活の密接な関係を指摘しているにもかかわらず、芸術がどのような仕方で共同体を構築することができるのかについてはあまり探求されていない

そこで本稿では、ヘラーの「共同体」理論を取り入れ、人々の日常意識の観点から、芸術が共同体の構築において果たす役割と意義を探求する。具体的には、まず人々の日常生活における共同体と生活のリズムとの関連性を考察する。次に、戦後の日本において、芸術が人々の日常生活と徐々に結びついていく変化を概観する。最後に、筆者がフィールドワークを行い、実証調査も実施した日本の「かめおか霧の芸術祭」を例に、芸術が人々の日常意識にどのように影響を与え、共同体の構築に貢献するかをさらに探求する。

## 第1章 日常生活における共同体と生活リズムのつながり

### 第1節 日常生活における共同体の構成

ヘラーは『日常生活』の中で共同体を次のように定義している。

共同体とは、構造化され組織化された集団または単位層であり、そこでは比較的均質な価値体系が成り立ち、人は必然的にそこに属する<sup>8</sup>。

人々が日常生活の領域で、それぞれの価値観にしたがい、それぞれの共同体に属している。日常生活における共同体を「自然共同体」と「選択共同体」に分けることができる。自然共同体とは、個人が生まれる前から既に定められている共同体のことである。自然共同体においては、共同体が人々の価値システムを規定している。その基本的な価値観が一般的に遵守されるべきものとして約束される。一方、選択共同体は、個人が自発的に加入した結果である。

選択共同体は、個人がそのなかで意図的に共同体を組織し、かつその共同体を類本質的な背景において動かしている。特定の社会的な結合と本質的に相似する関連性の覚醒および努力を通して…類本質的な目標の実現に構造的な助力を提供する。これらは共同体メンバーの個体的な自我意識を表し、価値論レベルでの手本も示してくれた。そして最後に最も大事な、生活スタイルを提供してくれたことである<sup>9</sup>。

そして、二つの共同体の間にある最も大きな

違いは、人々の主体的な選択にかかわるかどうかである。「自然共同体」の中では、個人は共同体によって決定される存在である。これは一方的に強制され、あるいは決定される過程である。「選択共同体」の中では、個人と共同体の間の関係は相互的である。すなわちこれは互いに影響を与え合う過程である。ヘラーは「日常生活」で未来の社会の共同体の基本的な姿を次のように描写している。

個人が具体的な生活の方法を選択し、その中で特定の普遍的な共同体（または統一体となる人類）の普遍的な基準を実現することを望む共同組織を選ぶということは、全体の類似性を具現化する可能性のある任意の共同体を選ぶことである。それは異なる水準や方法で行われる場合もあるが、まぎれもなく、私たちは未来の社会の共同体をこの第二のタイプの共同体に近い価値の同質性として想像するべきである<sup>10</sup>。

ヘラーは、未来の社会の共同体は「自然共同体」ではなく、「選択共同体」に基づく自主的な選択と共同構築に近いものであると考えている。

同時に、共同体の形成と発展は、人々の日常生活と非日常生活の相互作用と深く関連している。例えば、農耕時代には、人々は自然に基づいて生活し、対人関係は主に自然の領土における氏族や村の形で存在した。有賀喜左衛門と中村吉治は、「イエ・ムラ理論」の中で、当時の「自然共同体」を「家」や「同族」といった「血縁」的家集団ないし家連合を伝統的コミュニティのコアとしてとらえていこう<sup>11</sup>、と述べている。自然共同体に属する人々は非日常を求めて年中行事を行っている。これは日常から脱出する重要な方法でもある。熊倉純子は、当時の共同体と非日常の関係は次のように言及している。

日常生活の営みに対し、非日常的な営みとして挙げられるのが「祭り」である。小さな土地のなかで水を分け合い、互いに協力しながら農作物を皆で育てるために、和を尊び自分勝手な振る舞いを嫌うムラ社会のメンタリティは、意見が対立することを避けようとする国民性に今でも根強く残っている。ムラ社会の日常は閉塞感を生み、活力の低下をもたらすが、それを打破する非日常的営みが「祭り」である<sup>12</sup>。

人々が同じ地域の「自然共同体」に所属していても、「年中祭事」のような非日常の活動を

通じて、日常生活が補完され、自然共同体が強化される。

第2節 近代共同体における生活リズムの変化  
「自然共同体」であれ「選択共同体」であれ、人々の日常生活と非日常生活の交替のリズムは不変である。

日常生活について、ヘラーは、「いつの時代にもある社会的再生産の可能性を創り出す個々の再生産を特徴づける、もろもろの活動の全体である<sup>13</sup>。」と定義している。日常生活とは、個人の生活環境や個人的な世界という「それ自体（in itself）」の領域である。非日常生活とは、個人の再生産に基づく「自己のため（for itself）」の社会的再生産の領域である。非日常生活は「対象化した自己完結的な領域が生活に特別な意義をもたらすのは、経験的な生活よりも上位にあるからである<sup>14</sup>」。そのため、人々は日常生活リズムの「変化」を求めるとき、主に非日常生活の内なる精神的な側面に依存する。

また、ヘラーは芸術と個人の関係性を、次のように論じている。

芸術は人類の自己意識であり、芸術作品は常に「自分自身のための」種的存在の担い手である<sup>15</sup>。

ヘラーは芸術が人々の感情の発散や価値基準として機能できることを提案している。日常と非日常の生活が絶えず変わる過程で、人々は芸術を通じて感情の発散や精神的な満足を得る。

私たちが芸術作品を楽しみ、それを「利用」するとき、私たちはその作品の作者と同じように、種の本質にまで引き上げられる<sup>16</sup>。

上記の理論によれば、人々の内なる精神性によって日常生活に影響を与える手段として、芸術の重要性を肯定している。そして、非日常の影響を受けて人々の意識が変化するにつれ、自らの日常を省みるようになる。山田真茂留はその変化を次のように語っている。

人は非日常的な意味空間へと一気に飛翔し、そこにおいて自らを超越する観念や存在の凄みに打たれ、そして再び舞い降りた先の日常生活世界を新たな気分で眺めることとなるにちがいない<sup>17</sup>。

芸術の影響のもとで、自分自身の日常生活を見直し、考え直すことができる。芸術という触媒を通じて「自己のため（for itself）」のレベルにまで高められるのである。ヘラーは、芸術が

人々に与える影響を次のように表現している。

私たちが芸術品を楽しむ、または鑑賞するとき、私たちもまた、その作者と同様に、種の本質的なレベルまで引き上げられる。この理由から、創作された芸術は、浄化の過程を通じて、道徳的な浄化の代理人として活動することができる<sup>18</sup>。

個人の意識や価値観が芸術の影響を受けて変化し始め、非日常的な空間で本来の日常生活の視点から抜け出し、新たな視点で自らの日常生活を検証・反省する。

芸術創造のプロセスは多様な価値の存在を示すだけでなく、従来の組織形態だけでは実現しなかったような様々な世代・立場・考え方の人たちのつながりをつくるという、新しい公共性のかたちをも示している<sup>19</sup>。

上記吉澤弥生の理論によれば、非日常生活としての芸術は、人々の日常意識を変容させる重要なメディア＝契機である。

人々の生活は日常と非日常の相互作用によって形成され、日常は非日常に適切な条件を提供し、非日常は人々の日常意識を高めながら日常に浸透する。この変化する個人意識は、新しい「共同体」を構築するための鍵である。本章はヘラーの日常生活に対する考えを基に、人々の精神的側面から芸術が人々の日常生活に与える影響に焦点を当てた。次の章では、日本を例に、1950年代以降の日本での芸術と人々の日常生活の関係の変遷を考察する。特に、芸術がどのようにして人々の日常生活と結びつき、新しい共同体の構築を促進するプロセスについて探求する。

## 第2章 日常生活における芸術の形態の変遷

### 第1節 地域に根ざし、人々の日常生活に溶け込む芸術

日本における芸術活動の歴史を振り返ると、芸術が次第に日常生活と結びついていくプロセスが見えてくる。1950年以降、世界的な「オブ・ミュージアム」運動は、ギャラリーや美術館に作品を置くことに反対してきた。芸術作品をギャラリーや美術館から持ち出して、人々の日常生活に溶け込ませることを求めた。日本でも戦後、美術館から駅前や公園、道路沿いなどの屋外空間に作品を置くようになった。1961年、日本初の大規模な野外彫刻展「UBE ビエンナーレ」<sup>20</sup>が開催され、彫刻作品の公募<sup>21</sup>を通じて地域環境や都市景観の改善が図られた。この成功例に続き、1968年には「神戸須磨離宮公園現代

彫刻展」、1969年には箱根彫刻の森で「現代国際彫刻展」が開催され、1970年以降、都市景観の整備と彫刻を結びつける試みが全国に広まった。しかし、これらの彫刻は設置場所を考慮せずに制作・選定されたため、彫刻作品と人々の生活ニーズとの間に乖離が生じ、「彫刻公害」問題の原因にもなった。

1980年代に入ると、日本経済の急速な発展に伴い、戦後の復興事業も進んできた。芸術と日常生活の分断という問題が取り上げられるようになった。柳澤有吾は、芸術作品と人々の日常空間との関係について次のように語っている。

街や公共空間の「場」としての性格や意味を読み取り（あるいは積極的に付与）<sup>22</sup>。

このような芸術作品だけが、設置される空間と密接な関係を築くことができる。同時に、この時代の人々は、物質的な生活を追求するための仕事に疲れ、物質的な側面を追求するよりも内面的な、精神的な側面に焦点を当てるようになった。古川は当時の人々の生活リズムの変化について次の指摘をした。

都市におけるライフスタイルが、生産（仕事）最優先から個性とゆとりへとシフトしていくのに合わせて、豊かな自然に囲まれてリフレッシュするためのリゾート開発が過熱していった<sup>23</sup>。

このような背景において、自然豊かな屋外空間や地域空間が注目されている。「サイト・スペシフィック<sup>24</sup>」を中心とした芸術の形がはやり始めた。作品と周辺環境との一体化や、作品と人々の日常空間との新たなつながりの構築に注目が集まっている。作品を鑑賞することで、作品とその周辺環境との関係性を感じることが期待されている。その典型的な例として、1980年に静岡県浜松市で開催された「浜松野外美術展」が挙げられる。浜辺に展示された作品は、塩分を含んだ空気や強風といった環境的な制約を考慮しながら、適切な素材を選び、周囲の環境と調和させることを実現した。この浜松野外美術展の成功を機に、1984年に栃木県の石切り場で「大谷地下美術展」、同年に岡山県瀬戸内海のオリーブ園を中心に「牛窓国際芸術祭」が開催された。

この時期から芸術は、美術館から人々の日常空間に溶け込むようになってきた。「サイト・スペシフィック」の芸術作品は、人々の心を満たすとともに、環境や空間との結びつきも強くなり、芸術と日常空間をつなぐ土台作りに寄与している。ところがこの段階では、作品はアー

ティストの視点を通してのみ、芸術と環境空間のつながりを鑑賞者に示し、鑑賞者の視点や考え方は反映されない。その結果、芸術作品と人々自身との結びつきが、双方向的なコミュニケーションの構築には至っていない。人々が精神面の満足を追い求める中、芸術と日常生活との融合をさらに進め、より深いレベルで共鳴をそそるためには、人とのつながりを強化する必要がある。

## 第2節 芸術活動による日常生活リズムの再構築

1990年代に入ると、芸術と日常生活の相互作用は次第に広く注目を受けるようになった。この背景の下、1988年から1998年まで山梨県白州町の横手・大保地区で行われた「アートキャンプ白州<sup>25</sup>」はこの変化を代表的なアートイベントのひとつになった。この活動は地元に住む舞踏家の田中泯が始めたイベントで、日常の農作業を芸術で表していた。舞踏のパフォーマンス公演を中心に、美術、演劇、音楽、映像などさまざまなジャンルの表現活動がワークショップやコラボレーションといった形で行なわれる。地域住民が参加できる芸術活動が現れてきた。田中泯は前田礼や戸谷莉維裳とのインタビューで、芸術と日常生活の関係について次に語っている。

僕はそもそも表現を日常と切り離して考えていなかったし、今でもそれは変わりません。「祭り」はまさに営みという日常の連続があるからこそ起こり得る。舞台やギャラリーのない場所で、どう自分の表現を生き返らせることができるのか、成立させることができるのかということが僕にとって大きなテーマだったと思います<sup>26</sup>。

田中泯は、芸術家としての視点から、芸術創作は日常生活に深く根ざしているべきであり、人々の日常生活と関連付けて作品に更に深い意味を与えると提案している。

2000年代に入ると、芸術と地域振興の分野の結合モデルはさらに評価されるようになる。熊倉純子は当時の日本で起きていた芸術活動の変化を次のように述べた。

社会における文化環境が変化していく中で、芸術の新しい環境を目指し、同時代の社会の中に入り、個別の社会的事象と関わりながら展開される、共創的芸術活動が見られるようになる<sup>27</sup>。

このなかでもっとも代表的なのは2000年の新潟県で開催された「大地の芸術祭 越後妻有アー

トリエンナーレ」である。この芸術祭は3年に一度開催される。2018年は51日間の開催で約54万人の来場者と約65億円の経済収入を地元にもたらした。外部からの経済収入をもたらすだけでなく、この持続的な活動は地元の人々のライフスタイルにも影響を与えている。例えば、芸術活動の発祥地である松代地域では、ロシアの芸術家夫婦イリヤ&エミリア・カバコフによって完成された作品「棚田」があり、これは第一回から現在まで芸術祭で最も人気のある常設展示である。アーティストたちは、耕作放棄された畑での地元の人々の日常生活を芸術で表現し、この作品が地元の農業への反省を呼び起こしている。農業は地元の人々にとって日常生活の一部であるが、外部から訪れる人々にとっては非日常的な体験である。この作品を通して、地元の人々と観光客との間に双方向なコミュニケーションの場が構築された。この非日常的な空間で日常生活とは全く異なる新たな体験を通して、観光客は地元をより直感的に理解する。一方、地元の人々は、日常的な農作業に慣れ親しみ、地元の魅力やアイデンティティの再発見することもできる。

現在、芸術活動の影響により、地元の特有な農業文化の魅力に気づくようになった。住民主導で様々な農業関連の芸術活動、例えば「まつだい棚田バンクプロジェクト」、「FC越後妻有サッカーチーム」、「越後まつだい里山食堂」や商品開発「大地の米」などが展開され、地元の農田の栽培が徐々に復活している。これらの活動は地元で芸術作品を創造するだけでなく、参加者や地元の住民は芸術活動の単なる見る側ではなく、芸術活動の主役として活動の運営や管理に参加することもできるようになった。クレア・ビショップは芸術と人々の関係について次のようにまとめた。

アーティストは物的対象の創造主たる個人というより、むしろ状況の協働の試行者や実践主体とみなされる」…「観者」や「傍観者」とされていた鑑賞者は、今日では共同制作者や「参加者」へととらえ直される

<sup>28</sup>。

芸術活動は地元の日常生活と密接に関連しており、外来者と地元住民との新しい社会的な関係が築かれ、地元の人々は自分たちの生活に新しい意識を持つようになった。双方が芸術活動での相互作用を通じて共通の話題や関心を持つようになり、芸術はもはや生活環境に溶け込む「実体」的な芸術作品だけでなく、日常生活の「仕組み」として、芸術家、組織者、住民の間

に持続可能なコミュニケーションネットワークを構築するものとなった。現在の「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」は2010年から開始され、参加する外部の人々と地元の住民の数は増加し続けており、このかつての遠隔地は次第に頭角を現し、世界的に知られる芸術地域となっている。

以上のように振り返ると、芸術と人間の変化してきたことがわかる。より豊かで多様な芸術形式が生まれ、芸術は単に鑑賞するものに留まらず、人々の日常生活と相互に作用し、関連するようになった。このような人々の視点や感じることに焦点を当てた芸術活動は、地域住民、行政、観光客などを結びつけ、新たな人間関係のネットワークを構築する。日常生活と深く結びついているため、人々は芸術が伝える内容に対して共感を持ちやすくなり、異なる視点からのコミュニケーションが行われ、日常の意識に影響を与え、新しい価値観を形成する。このような変化は、所属する共同体から逃れたいと考える人々の背景の中で、新たな共同体を見出す可能性を提供する。

### 第3章 芸術が日常意識に与える変容の探求

#### 第1節 亀岡市の日常生活に基づく非日常的な芸術活動

芸術の形態が多様化するにつれ、その影響は人々の日常生活に浸透し、社会の各層と結びつく接点となっている。熊倉純子は、「アートは小さな起爆剤」として「新しい関係性を切り開く力がある」と考え、アートプロジェクトによって、「プロとアマチュア、さらには一般社会の無関心と、幾重にも分断されていた現代芸術の世界を共創の場へと変貌させていきます29。」と語っている。本稿では、「かめおか霧の芸術祭」（以下「霧の芸術祭」と称する）を実証研究のサンプルとして選択した。「霧の芸術祭」の独特な点は、他の芸術活動のように有名なアーティストを招待することに焦点を当てるのではなく、地域の住民の参加と創作をより重視することである。年間を通して芸術活動を展開することで、人々が日常生活の中で芸術を発見し、追求することを促され、人々自身が日常を再考することこそ真の芸術である。このような変化は、日常生活を基に新しい価値観を形成することを人々に促進し、政府、学校、住民などの各主体間で相互に融合する機会を創出する。筆者は、亀岡市を何度も訪問し、調査を行った結果、「霧の芸術祭」が地域資源の良好な循環を促進し、亀岡の発展ニーズに適した新しい共同体を構築していることを強く感じた。このような新興芸術活動は、芸術と日常生活のつながりを検討するために適切であり、芸術は

人々の日常生活での共同体の構築について検討を深めることで本稿の議論も進むと考えられる。

亀岡市は京都府の中西部、山々に囲まれた亀岡盆地にある。亀岡盆地は中央に大堰川と保津川（桂川）が流れ、一年中霧に覆われる特異な地形である。このような環境では、「洗濯物が乾かず、髪型も崩れる」、「朝から憂鬱になる」、「視界不良で車や自転車が運転しづらく、迷惑だ」などと人々が思い、「山を越えると別世界」と京都市の友人から揶揄されることもあるそうだ。亀岡の人々は自身の土地、風土にこのような印象を持ち。文化的に誇れるものは何もないとさえ感じている<sup>30</sup>。地域人口は87228人(2022年9月)であるにもかかわらず、京都市までの距離がわずか20kmで住民や企業は経済活動のすべてが京都市を好む。住民の13%は京都市と通勤・通学している。そのため、亀岡市は京都市のベッドタウンとも呼ばれている。地域経済の観点から見ると、2018年の地域経済循環率は65.4%に過ぎず、「地産地消」はできていない。消費は地域外に流出し（2018年は50億円の損失）、これは投資額（256億円）の44%が地域外に流出していることに相当する。しかし、亀岡市には資源がないというよりも、地域資源が豊富であるにもかかわらず、地域住民が認識していない可能性が高い。

このような背景において亀岡市は2017年から「霧の芸術祭」を始めた。総合プロデューサー松井利夫が「亀岡のまちの人たちの営みが芸術として見えるまち」作りについて、芸術祭を次ように定義した。

暮らしの中に芸術があって、もっと言えば暮らしそのものがアートなんですね。市民ひとりひとりがアーティストだし、モノだけじゃなくて、先人の知恵とか職人の技とか、畑の美しい風景とか、形のないものも芸術作品なんです。そういった日々の営みや暮らしの耕しを年間を通して行っていく<sup>31</sup>。

伝統的な芸術祭と異なり、有名なアーティストの招待や他所から来たアーティストと住民との協力が不要である。むしろ住民主導で芸術の観点から自分の日常を見直すことが目的である。すべての生命を輝かせる技術を持つ人がアーティストであり、従来の芸術観やアーティスト像の再定義を行っている。なお、この「霧の芸術祭」一定の時間に開催される「期間固定イベント」ではなく、「通年イベント」を不定期に開催している。芸術作品を展示する「城跡芸術祭」のほかに、経済（ボンボンマルシェ）、

農業（アートコミュニケーター、KIRI FARM）、環境、教育（こどもみんげい、KIRI2 芸術大学、KIRI WISDOM）とも結びつけられている。「霧の芸術祭」を通してアーティスト、行政、住民をつなぎ、亀岡らしい循環型の経済・文化交流ゾーンを築き上げる。その目的は、芸術活動を開催することだけでなく、人々が芸術を通じて参加し、地域への帰属感を強化し、地域の発展に適した新しい共同体の空間を構築することである。

## 第2節かめおか霧の芸術祭による日常生活の変化

「霧の芸術祭」は、市民の参加を中心にした芸術活動を開催することで、芸術と日常生活を密接に結びつけている。亀岡の前副市長、仲山徳音氏はインタビューで「かめおか霧の芸術祭×X（かけるエックス）」に関する考えを明らかにした。

課題はたくさんあるんですけど、芸術の力を使って、楽しみながらまちをつくっていく。農業、福祉、教育、いろんな課題解決を図っていく。ゆたかな地域資源やいろいろな人達とつながりながら地域づくりをしていくのが、かめおか霧の芸術祭×X（かけるエックス）です<sup>32</sup>。

「霧の芸術祭」は、単に芸術活動であるだけでなく、地域住民の参加を促す方法や地域資源を統合する方法としても機能している。注目すべきは、亀岡市は内閣府より2020年度「SDGs未来都市」に選ばれ、さらに亀岡市が提案した政策『かめおか霧の芸術祭×X（かけるエックス）持続可能性を生み出すイノベーションハブ』が、「自治体SDGsモデル事業」に選定された。これは、芸術が亀岡の持続可能な発展を推進する強力なツールとしての役割を強調している。

「こどもみんげい」という芸術活動はその代表的な事例の一つである。以前、農業が消費者や市民との接触が少なかったため、地元の農産物の価値や魅力はほとんど認識され、体験されていなかった。「こどもみんげい」を通して、地元の異なる業界や年齢層の人々の間に新しいコミュニケーションの空間が生まれ、みんなで野菜の栽培の楽しさを共有することができた。この活動は、主に亀岡や近郊に住む子供たちを中心に行われている。子どもたちが地元の陶芸家と一緒に、地元で採れた野菜を使って日常使いの道具を作るアートイベントである。この活動は、2022年に3つの段階に分けて実施されている。第1段階は、地元の農家に出向いて野菜を収穫し、野菜の形をした石膏模型を作る。第2段階は親子活動形式で、子どもたちが協力して粘土

を使って野菜の器を作る。第3段階では、地元の陶芸家が器を焼成し、野菜を使ったカレーを自分の器で試食してもらう。この活動は、野菜の展示方法だけでなく、地元の住民の地域の農産物の強みに対する認識も深まり、地元の農業の魅力を再評価することができた。

別の代表的な事例は「ボンボンマルシェ」である。これは2019年3月より、亀岡市政府の協力のもとで展開されたアートマルシェの芸術活動である。この活動は“循環”をテーマにしており、日常生活に対する新たな認識を人々に提供しながら、地域資源の循環利用を強調している。活動は亀岡地域のコト（体験）とモノ（地場産品）とを掛け合わせている。そこで、地元の有機農産品の販売、地産地消の料理とお菓子作り、地元の素材を使った陶芸・木芸のワークショップである。これにより、人々は地元で調達した生活用品や技術を自由に購入し、体験することができる。また、地元企業にとっては新たな販路が生まれ、企業間の協力ネットワークが促進される。対面販売を通じて、人と人とのコミュニケーションや協力が促進され、新たなファンやリピーターが増える。その結果、地域内での循環型の経済ネットワークが形成され、地方企業の日常的な経営をサポートし、その発展を促進する。地産地消と地域内消費を推進している。

「霧の芸術祭」の持続的な影響の下で、人々の日常生活に対する認識や体験は深く変化している。例えば、地元の住民・奥岡は以下のように述べる。「芸術季に参加することで、隣人との関係を強化するきっかけを得た。それに、新しい仕事の機会も増えた<sup>33</sup>。」日常生活への認識が「買い物に行こう。面白そうだから行こう」というものから「次にこれを持っていこう、何か面白いことが起こるだろう」という意識・行動へ変わる人が増えてきている<sup>34</sup>。同時に、市政府も積極的に反応している。令和5年度第1回かめおか霧の芸術祭実行委員会で、委員たちは芸術祭が地域にもたらす変化を次のように述べている。

最初、かめおか霧の芸術祭を始めた際は多くの方々は何をやっているかわからないという反応でした。議員の方々も割とどういふことなのかというような反応だったのですが、何回も続けて経験を重ねていくにつれて、ポジティブに受け止めてくださったり、面白いねというようにおっしゃってくださって、空気が変わってきました<sup>35</sup>。

亀岡市役所文化国際課の小塩睦子のコメントからも、行政への影響が次のようにまとめられる。

芸術祭のイベントによって行政と民間の連携はより濃密になり、関連部署の数も増えていく。このような他部署とのコラボレーションは、乗数効果を達成できる。かめおか霧の芸術祭をいかに生かし、これまで以上の成果を出していくか、これは市民とともに考えてきたい。芸術祭とのコラボをさらに増やしていきたいと思っている<sup>36</sup>。

現在、「霧の芸術祭」の地域への影響は継続している。「霧の芸術祭」は、人々に日常生活の中のリソースを再評価させることで、地域住民に適した新しい共同体を構築する。共通の話題や興味を持つ人々が新たに構築された共同体で交流することにより、コミュニティのつながりが強化されている。2023年5月に公開された「亀岡市第2期SDGs未来都市計画2023-2025」でも「霧の芸術祭」を地域発展計画の重要な部分として正式に取り入れ、地域の持続可能な発展を促進する方針とした。筆者は、このような芸術活動が将来も続けて、地域の各分野の主体間の協力や調整を助け、日常生活に更なる価値と意味をもたらすと信じている。

#### 結び 今後の課題

第1章では、人々の日常生活における共同体と生活リズムの関係を探った。第2章では、芸術が人々の日常生活に与える影響と変化を検討した。そこから、日常生活における人々の意識転換の重要性が明らかになった。芸術を通じて住民の生活への関心や創造力が引き出された。これは地域の文化や自然環境への自発的な関心と保護を促すものである。人々の日常意識を高めることで、新しい共同体が自発的に構築され、地域の主体との連携も強化される。地域の変革や新しい共同体の構築を促進することができる。第3章では、かめおか霧の芸術祭の事例研究を通じて、芸術が共同体の構築において、特に地域との関係に重点を置き、下からの日常の意識変容の介入を強調するべきだと考えられる。日常生活の実際の問題解決を中心に、芸術活動を通じて関連する主体を結びつけ、地方行政、学校、企業、芸術家、地域住民間の新しい人間関係のネットワークを構築することは、共同体に新しい活力を注入する実践として提唱される。

ただし、本稿は特に亀岡を中心にケーススタディを行ったが、他の地域で応用可能なところとそうでないところは当然存在する。今後は他

の地域をフィールドとして選定し、その実情に合わせて検討を深めるなかで、地域それぞれの芸術モデルをいかに構築するかという方法論をさらに練り上げていきたい。



<sup>1</sup> 桜井徳太郎・谷川健一・坪井洋文・宮田登・波平恵美子『ハレ・ケ・ケガレ共同討議』青土社、1984年、p. 23。

<sup>2</sup> 原田保、西田小百合「“スピリチュアリティ”の地域デザインへの活用」『スピリチュアリティによる地域価値発見戦略』学文社、2017年、pp. 1-11。

<sup>3</sup> アグネス・赫勒（アグネス・ヘラー）『日常生活』衣俊卿、哈尔滨、黑龙江大学出版社、2010年、p. 103。（論文執筆者訳）

<sup>4</sup> 著書：『日常生活』（105）（論文執筆者訳）

<sup>5</sup> 本稿で述べられる「日常意識」とは、人々が日常生活において持つ認識や思考、そしてそれに基づく行動のパターンを意味する。

<sup>6</sup> 吉澤弥生『芸術は社会を変えるか？文化生産の社会学からの接近』青弓社、2011年、p. 97。

<sup>7</sup> 熊倉純子等編著『日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1999-2012年補遺』アーツカウンシル東京、2015年、pp. 33-35。

<sup>8</sup> Ágnes Heller（アグネス・ヘラー）、*Everyday Life*, Routledge, 2015, p. 34.（論文執筆者訳）

<sup>9</sup> 著書：『日常生活』（33）（論文執筆者訳）

<sup>10</sup> 著書：『日常生活』（36）（論文執筆者訳）

<sup>11</sup> 伊藤守・小泉秀樹・三本松政之・似田貝香門・橋本和孝・長谷部弘・日高昭夫・吉原直樹（編）『コミュニティ事典』春風社、2017年、p. 4。

<sup>12</sup> 著書：『日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1999-2012年補遺』（33-35）

<sup>13</sup> アグネス・ヘラー『個人と共同体』良知力・小箕俊介、東京法政大学出版局、1979年、pp. 37-39。

<sup>14</sup> アグネス・赫勒（アグネス・ヘラー）、『道德哲学』（道德哲学）衣俊卿、哈尔滨、黑龙江大学出版社、2014年、p. 255.（論文執筆者訳）

<sup>15</sup> Ágnes Heller, *op.cit.*, p. 107（論文執筆者訳）

<sup>16</sup> Ágnes Heller, *op.cit.*, p. 107（論文執筆者訳）

<sup>17</sup> 山田真茂留『非日常性の社会学』学分社、2010年、はじめ。

<sup>18</sup> 著書：『日常生活』（104）（論文執筆者訳）

<sup>19</sup> 『芸術は社会を変えるか？文化生産の社会学からの接近』p. 255

<sup>20</sup> UBE BIENNALE

HP<https://ubebiennale.com/about/>（2023年6月15日閲覧）

<sup>21</sup> 竹田直樹、八木健太郎「野外彫刻展型の彫刻設置事業の変遷」環境芸術学会、2004年、p. 2

（①一般公募を実施する。②参加者は模型を制作し応募する。③模型を審査する。④入選者は実物大の作品を制作し展覧会場に搬入仮設する。⑤野外彫刻展として一般に公開する。⑥実

物大の作品を審査し各種の賞を買取り賞として与える。⑦買取り賞として取得した複数の作品を適切な設置場所を捜して恒久設置する。）

<sup>22</sup> 柳澤有吾『パブリックアートの現在』かもがわ出版、2017年、p. 11。

<sup>23</sup> 古川彰・松田素二「観光という選択—観光・環境・地域おこし」『観光と環境の社会学』新曜社、2003年、p. 7。

<sup>24</sup> 暮沢剛巳編『現代美術を知るクリティカル・ワーズ』フィルムアート社、2002年、p. 89。

（「サイト・スペシフィック」とは、特定の場所、特定の空間と分かちがたく結びつき、そのような不可分の関係性の中で成立する美術作品のあり方をさす。具体的な表現の形としては、インスタレーション、アースワークなどを挙げることができる。）

<sup>25</sup> 同町に拠点を置く舞踏資源研究所（代表・田中泯）とアート・プロデューサーの木幡和枝が中心になって運営されており、舞踏のパフォーマンス公演を中心に、美術、演劇、音楽、映像などさまざまなジャンルの表現活動がワークショップやコラボレーションといった形で行なわれる。また、参加アーティストの多くが同町に定住して農業を営んでいることから、多くの表現に農業が取り入れられていることも特徴のひとつ。

<sup>26</sup> 前田礼、戸谷莉維娑『試展—白州模写「アートキャンプ白州」とは何だったのか』市原湖畔美術館、2022年、p. 28。

<sup>27</sup> 『アートプロジェクト芸術と共創する社会』（13）

<sup>28</sup> クレア・ビショップ（著）、Claire Bishop（著）、『人工地獄 現代アートと観客の政治学』（Kindle）大森俊克（翻訳）、フィルムアート社、2016年、pp. 161-166。

<sup>29</sup> 熊倉純子（監修）、菊地拓児（編集）、長津結一郎（編集）『アートプロジェクト芸術と共創する社会』水曜社、2014年、p. 13。

<sup>30</sup> RESAS Portal 地域経済分析システム RESAS の利活用サイト HP [https://resas-portal.go.jp/medias-import/A190050\\_contest.pdf](https://resas-portal.go.jp/medias-import/A190050_contest.pdf)（2023年7月1日閲覧）

<sup>31</sup> 持田博行『かめおか霧の芸術祭アーカイブブック 2022』かめおか霧の芸術祭実行委員会、2023年、前言

<sup>32</sup> 『めぐるかめおか霧のまちかめおかをめぐりめぐる 18日間』[http://kameoka-kiri.jp/wp/wp-content/uploads/2023/04/archivebook\\_2020-meguru.pdf](http://kameoka-kiri.jp/wp/wp-content/uploads/2023/04/archivebook_2020-meguru.pdf)、p. 7。

<sup>33</sup> 2023年7月2日 12:00 亀岡市 KIRI CAFF でのインタビューより。

<sup>34</sup> 『かめおか霧の芸術祭 ARCHIVE BOOK

---

2021』 [http://kameoka-kiri.jp/wp/wp-content/uploads/2023/04/archivebook\\_2021-low.pdf](http://kameoka-kiri.jp/wp/wp-content/uploads/2023/04/archivebook_2021-low.pdf)、p. 18。

<sup>35</sup> 亀岡市公式 HP（令和 5 年度第 1 回かめおか霧の芸術祭実行委員会議事録要旨）

<https://www.city.kameoka.kyoto.jp/uploaded/attachment/31634.pdf>（2023 年 6 月 23 日閲覧）

<sup>36</sup> 2023 年 6 月 30 日 15:30 亀岡市市役所 B1 開かれたアトリエでのインタビューより。

## Function of Artistic Activities in Community Building: Referring to Heller's Theory of Everyday Life

HU YIHANG

In the process of maintaining the continuous functioning of daily life, the rhythm of people's lives cannot be separated from the alternating changes between daily and non-daily activities. During the farming period, people's dependence on agriculture, the rhythm of changes in daily life was adjusted according to the busyness and idleness of farming. With modernization and the advancement of mechanical technology, farmers were liberated from arduous agricultural tasks. Consequently, people's lifestyles and survival began to operate independent of nature's rhythms, adhering instead to the principle of maximizing efficiency. However, it was soon realized that with the rapid development of the economy, the high intensity of work frequency made people feel exhausted. In this state, the conflict between the individual and the collective gradually intensified. To alleviate this sense of alienation, people have started seeking non-routine lifestyles as a temporary escape from the pressures of daily life. Simultaneously, as artistic forms continue to evolve and diversify, the combination of art and regional revitalization becomes a new option for non-routine living. However, this short-term, event-based model of artistic activity may limit the value of art. Therefore, we need to reevaluate what role art can play in constructing social communities beyond its function as a means of regional promotion.

This study is based on Agnes Heller's theory of "community" in *Everyday Life*. Starting from people's everyday consciousness, it delves into how art can help people reexamine and reconsider their daily lives and promote the construction of new communities. The paper reveals the profound impact of art on daily life and its evolving forms through a systematic analysis of Japanese artistic activities since the 1950s. Using "Kameoka KIRI Art Cultivation" in Kyoto Prefecture's Kameoka City as a case study, it further validates the critical role of art in community building through on-site research and interviews. The research findings in this paper suggest that in the process of community construction, it is essential to emphasize the close integration of art with local daily life and implement art activities that residents can participate in. By involving art in people's daily lives from the bottom up, it can strengthen connections between local government, schools, businesses, artists, and residents, creating a new social network and ultimately constructing a new community that truly aligns with local daily life.